

東京 IPO 特別コラム

2018年4月10日 Vol.119

IPO後にいきなりバリュー銘柄となった老舗企業

まだまだ先行きが不透明な株式相場ではありますが、そうした局面だからこそ好需給のIPO銘柄には人気が集まっているように感じられます。少しでもリターンを得ようと株式市場にリスクマネーを投じる短期投資家が狙う好需給のマザーズ銘柄の対極をなすのが数は少ないけど東証1部にダイレクト上場を果たした銘柄群です。中には日本郵政グループ3社のような国策会社に端を発したIPOもあり、IPO後の投資成果が必ずしも上がっていないケースもありますが、中にはIPO後、しばらくの調整を経て株価が2倍以上に上昇した銘柄もあります。

2015年IPOのメニコン(7780・安値1025円→高値3530円)やツバキ・ナカシマ(6464・安値1085円→高値3240円)、2016年IPOのユー・エム・シー・エレクトロニクス(6615・安値923円→高値3395円)、ソラスト(6197・安値912円→高値3130円)、KHネオケム(4189・安値1163円→高値3555円)、2017年のマクロミル(3978・安値1640円→高値3500円)、カチタス(8919・安値1638円→高値3530円)などはそうした株価上昇銘柄の代表例です。東証1部に直接IPOを果たした銘柄は業績が安定しており機関投資家の投資対象にもなることからIPO直後は不人気だとしてもその後は堅調な推移が期待されます。

そうしたIPOしたばかりの不人気銘柄に創業350周年を誇る老舗化学品、自動車樹脂部品メーカーの森六ホールディングス(4249・2017年12月20日上場)があります。公開価格2700円に対して2975円の初値で穏健な取引開始が見られた同社株ですが、IPO後に高値3450円がついた後は調整が続き、上値が重い展開が見られます。昨日は上場後の安値2770円をつけるなど成長の期待が乏しいのかIPO後すぐにバリュー銘柄になってしまった感があります。前3月期推定経常利益77億円に対して時価総額は454億円。来期予想PER9倍、PBRO.73倍、配当利回り2.8%という水準は低評価です。老舗企業で地味な企業とは言え、最近では炭素繊維のリサイクルを行うベンチャー企業にも出資するなど比較的アグレッシブな活動も見られます。昨年IPOしたばかりで認知度が低いのが低評価の背景なのかと思われそうですが、今後のIR活動によって評価が徐々に高まるものと期待されます。

ファッション系のバロックジャパンリミテッド(3548)のような大幅な業績下方修正でIPO後に株価が公開価格を一度も上回ることなく低迷した事例もありますが、マザーズ銘柄のような乱高下についていけない安定志向の投資家にとって東証1部へのIPO銘柄は取り組みやすい対象なのかも知れません。東証1部だから必ずしも安心ということはないですが、LIXILピバ(3564)やスシロー(3563)などIPO時に不人気だった銘柄の株価も上昇傾向が見られます。流動性が備わっている東証1部IPO銘柄はこれからも有力な投資対象となりえるものと期待されます。

(東京IPOコラムニスト 松尾範久)